

平成 30 年度第 2 回ヒアリ等防除に関する専門家会合 議事概要

日 時：平成 31 年 1 月 17 日（木）15:00～17:00

場 所：経済産業省 別館 8 階 850 省庁共用会議室

専 門 家：

岸本 年郎 ふじのくに地球環境史ミュージアム教授

五箇 公一 国立研究開発法人国立環境研究所生態リスク評価対策室長

橋本 佳明 兵庫県立大学自然環境科学研究所准教授

（※ 五十音順、敬称略）

【議事概要】

＜ヒアリの防除に関する基本的考え方について＞

- ・ 前回の案より充実したと思う。全体的に文章ボリュームが多く読み物のようなので、フロー図等概要版があると見やすい。
 - ・ 理想的な役割分担で良いので、国や都道府県、市町村の役割を示せると良い。
 - ・ 自治体等、主体によって調査やモニタリング精度に差があるのが現状だが、全体としてレベルを上げていくことが重要。
 - ・ どの調査手法を用いたら良いかの場合分けをし、調査者が方法を選択しやすいようにしてはどうか。また、アリの採取方法について、働きアリの場合だけではなく、女王などを確認した場合の方法も示せると良い。
 - ・ 薬効については今後書籍に取りまとめる予定があり、それを引用すると良い。
 - ・ ヒアリ発見時の調査期間が 1 か月で良いかどうかはこれで決定というのではなく、今後も議論が必要。アルゼンチンアリの例を考えても短いと思う。手間をかけずに長期間続ける方が良い。
- 昨年度からの当会合を経て記載しているものだが、状況に応じて判断が必要であることには留意したい。（環境省）
- ・ 今後、モニタリング等の調査期間は実施しながらバージョンアップすればよい。肝心なのは営巣が起きているかいないか、それが次の年にどうなっているかが重要
 - ・ 「ヒアリ」となっているが、アカカミアリや他の特定外来生物について対応しなくても良いというネガティブな印象を与えかねないので、注記が必要である。
 - ・ ご指摘の点について、加筆するなどする。広く使ってもらえるような概要版の作成なども考えていきたい。（環境省）

＜ヒアリ同定マニュアルの改訂について＞

- ・「基本的考え方」と同様に、読み物的になっている。LAMP法や写真で同定するための調査・写真撮影方法についても追記してはどうか。女王アリの同定方法を掲載したことは良いと思う。
- ・フローチャートの各項目部分に該当するページ数を追記すると、使用者にとって必要な情報を参照しやすくなるので、使い勝手がよくなると思う。
- ・国としてしっかりとしたマニュアルがあることは、自治体等の使用する側にとっても安心である。あとは見る人の意識による。WEBに載せる際にクリック選択式にするなど情報を参照しやすく改善することも考えてみてはどうか。
- ・指摘について、修正内容を追ってメール等で確認させていただく。講習会を開催する予定であり、修正が間に合えばさっそく活用したい。(環境省)

<今後の対応について>

- ・68 港湾調査について、基本的には今年度と同様でいいと考えるが、時勢の移り変わりで各港湾の取扱貨物量に変化が生じたり、新規の国際航路が増えるなど変化しつつある。監視するポイントについて、国土交通省とも相談しながら決めてほしい。
- ・今年度、原因は不明なもの、ヒアリの確認数が昨年度に比べ減少しているという事実がある。年度ごとにデータを取りまとめて分析し、翌シーズンに向けて情報を発信すると良い。現場の緊張感がなくなってしまうことが一番心配であり、自治体との連携を強めること、顔が見える関係を構築することも重要ではないか。
- ・他国との連携は難しいが、どうにか情報収集したいところである。一方で中国・韓国は日本の技術を欲しがっているので、研究者・実務者レベルの交流は進めたい。
- ・噴霧式殺虫剤については実装に向けて開発を進めている。
- ・環境省の地方事務所がエリア毎に自治体や関係機関との連携を担い、しっかりと指揮を執ってほしい。ヒアリの対策は、これまでの外来生物対策に比べかなり先進的であり、このことをモデルとしてどう体制を構築するのかのひとつのケーススタディにしてほしい。

<委員によるヒアリに関する話題提供>

○橋本委員より新しい忌避剤としてのわさび成分の利用について

- ・ヒアリについては中国からのコンテナに伴って侵入してくるケースが多い。しかしながら中国に対応を期待するのは現実的に困難なので、国内でどうにか対応するしかない。

- ・マイクロカプセル化したわさび成分をヒアリの忌避剤に使用することを想定した研究を始めている。元々は防カビ用の製品用に技術が確立され、博物館の収蔵庫でナフタレンの代替品としても使用する検討を進めていたものである。既に中国の生産工場で梱包材として使用実績もある。実験の結果、ヒアリのほか、アカカミアリにも忌避効果を確認したほか、揮発成分が容器等の内部に残っていれば殺虫効果も確認している。化学合成なので大量生産も可能であり、薬剤の使用ができない食品工場の倉庫などの忌避剤としても使用できる可能性がある。
- ・国際植物防疫条約（IPPC）の枠組みでも近年、海上コンテナ貨物の清浄管理の必要性が議論されていると聞いている。上記のような技術を活用するにあたって、どのような対応ができるのか、関係省庁で連携して国として検討してほしい。

○五箇委員よりLAMP法によるヒアリ識別法の開発状況について

- ・LAMP法に関して、Ver. 2 となり希望する機関等への配布の準備が整いつつある。コストは100回分で1000円程度。ヒアリだけではなくアカカミアリ、アルゼンチンアリでも技術的には確立している。一度この技術が完成すれば、様々な場面での使用が期待できる。今後は精度を確保しつつより簡易化を目指す。DNA解析は、もはや専門家でなくとも可能な領域まで来ている。全国レベルで監視体制を強化しなければならない中で、普及啓発ツールとして教材化するアイデアもある。

○岸本委員よりハヤトゲフシアリに関する情報

- ・名古屋港でハヤトゲフシアリの防除が進められている。液剤が非常に効果的で、少なくとも名古屋では対策がうまくいっており、根絶までもう少しという状態。新たな外来生物の侵入情報は、状況がはっきりわかるまで情報を伏せたい心情は分かるが、周知が遅くなって良いことはひとつもないだろう。
 - ・特定外来生物として早く指定し、出来る限り早いうちに対応すべき。
- 関係行政機関等への周知については検討したい。法指定については来年度の種指定のグループ会合などで議論していきたい。（環境省）

○オブザーバーからの発言

- ・IPPCでの議論の内容は確認し、情報共有したい。（農林水産省）

以上